

第1回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2009)

BoF セッション報告「Web 企業における研究・開発の『これまで』と『これから』」

岡本真 (ヤフー株式会社/京都大学)

稲垣陽一 (株式会社きざしカンパニー)

公野昇 (Microsoft Research Asia)

森正弥 (楽天技術研究所)

DEIM2009 の BoF セッションとして約 40 名の参加を得て開催された「Web 企業における研究・開発の『これまで』と『これから』」での討論を報告する。話題提供者となった本稿執筆者 4 名による各自の取り組み紹介を受けて、討論が行われた。会場からの発言が活発に寄せられた討論では、(1) ウェブ企業が有する大規模データの研究利用の可能性、(2) ウェブ企業と大学・研究機関の関係のあり方、(3) これまでのパラダイムにとらわれない、これからの連携の重要性が中心的な話題となった。

Report on BoF Session “Past and Future of R & D in Web Industry”
in 1st Data Engineering and Information Management Forum (DEIM2009)

Makoto Okamoto

(Yahoo Japan Corporation./ Kyoto University)

Yoichi Inagaki

(kizasi Company, Inc.)

Noboru Kuno

(Microsoft Research Asia)

Masaya Mori

(Rakuten Institute of Technology)

BoF Session “Past and Future of R & D in Web Industry” was held at the first day of 1st Data Engineering and Information Management Forum (DEIM2009). After giving explanation by each discussants, discussion had began. Mainly, topic of the discussion focused on following theme: (1) Potential of larger scale data which the companies own, (2) Relation between Web industry and Academia, (3) Importance of paradigm shift.

第1回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム（DEIM2009）の第1日目である2009年3月8日（日）に、BoFセッションの一つとして、「Web企業における研究・開発の『これまで』と『これから』」が開催された。BoFセッションの開催は、前身のデータ工学ワークショップ（DEWS）時代を含めても初めての試みであり、参加者の出足が心配されたが、無事40名ほどの参加者を得ることができた。



さて、セッションでは冒頭に森正弥（楽天技術研究所）、公野昇（Microsoft Research Asia）、稲垣陽一（きざしカンパニー）、岡本真（ヤフー株式会社/京都大学）の順に、自己紹介とこれまで取り組んできた産学連携やUniversity/Academic Relationsの活動が語られた。ここまでは話題提供であり、以降予定の23時を越えて討論が行われた。

まず、これまで進められてきたウェブ企業が有する大規模データの研究利用が大きな話題となった。研究側からはデータ提供への要望や課題が、企業側からはデータ提供に伴

うリスクと、そこに伴う責任が述べられ、企業・研究の双方にとってデータ活用のこれからを考える上で示唆的だったのではないかと。

ここから話題はウェブ企業と大学・研究機関の関係のあり方、特に両者間の人材流動性へと転じていった。企業側からは大学から企業へ、そしてまた企業から大学へと、企業と大学の間を行き来できるキャリアパスを大学側が主体的に実現する必要性が指摘された。大学側からは企業内における研究職の位置づけについての質問が出され、楽天技術研究所の事例紹介や、開発に従事するエンジニアと研究的な観点を持つリサーチャーとの両立の可能性が示された。

以上、論点を中心に幅広く展開された討論だが、終盤に田中克己・京都大学教授より発せられた「我々はもはやクラシックなパラダイムにはまり込んでいる場合ではない」という言葉を受けて、話題提供者の4名が、これからに向けてのそれぞれの思いを語る形で2時間を超えるセッションの幕を閉じた。

もとより、2時間ですべてに結論が出るテーマではないが、学部学生や大学院生、若手教員からの発言も多く、「これまで」ではなく、「これから」を考える良い機会になったのではないだろうか。

最後に継続開催への期待が高まるほど素晴らしい準備をご担当くださった石川佳治先生（名古屋大学）、的野晃整先生（産業技術総合研究所）に心から御礼申しあげたい。

謝辞

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（情報爆発）計画研究「情報爆発に対応する新 IT 基盤研究支援プラットフォームの構築」（課題番号 18049073）によるものです。ここに記して謝意を表します。